2018年 春号

僧　伽

第101号
僧伽編集委員会
〒921-8031
金沢市野町２丁目32-4
徳法寺内
TEL (076) 241－5219
題字　本多　千翠

「私は如来大悲の恩徳を感謝する」と言わないで、「南無阿弥陀仏」という言葉でもってその謝念を表現しているのだということです。

寺川俊昭『親鸞の仏道』

寺川俊昭：一九二八年生まれ。大谷大学元学長。名誉教授。『親鸞の仏道』については、本の紹介欄を参照ください。

バベルの塔

常徳寺　西山　彰

有名な、「バベルの塔」である。作者ブリューゲルは、一五六三年と一五六五年に同じ画題で二つの作品を手掛けている。作品の大きさから前者は「大バベル」、後者は「小バベル」と区別されている。昨年小バベルの方が、来日し、話題となった。

東京と大阪で公開されたが、私は大阪の美術館で見ることができた。小バベルと言われるだけあって、縦六十センチ、横七十五センチの画面は、想像していたよりも小さく感じられた。

旧約聖書のバベルの塔のはなしは、よく知られている。天にも届くような巨大な塔を建設しようとした人々が、神の怒りをかったというはなしである。彼らは共通の言語を奪われ、神をも恐れる試みを中断せざるを得なくなった。この絵はまだ建設途中の様子を描いたものである。

このようにヨーロッパでは、人間の傲慢を神が罰するというパターンのはなしが多い。

そこには、大きく二通りの解釈があると言われている。人間の思い上がりに対する批判か、それともここまで見事な建築物を構築してしまう人間の力に対する讃美か。どちらを取るかは見る者に委ねられているといえるだろう。

しかし限界まで細密に描き込まれた画面を目の前にすると、神よりも人間の方に軍配を上げたくなるのも事実だ。

木村美代

無私の日本人

最近、歴史学者である磯田道史さんがかかれた「無私の日本人」という本をある方が貸してくださいました。

この本では江戸時代に生きた、全国的にはあまり知られていない人々のお話しが紹介されています。

そのひとつ仙台藩にある「吉岡宿」のお話しです。

生活が困窮し、明るい未来の見えない村を嘆く穀田屋十三郎。今だけではなく将来この村で生きてゆく人々も豊かに暮らせるにはどうしたら良いか…同士とともに考え行動してゆきます。

藩にお金を貸して、その利息を受け取るという妙案が浮かび、未来永劫、村の人々が豊かに暮らしてゆけることだけを目指して、身を削り、危険をおかして藩と掛け合います。時間をかけて仲間を募り、村人に丁寧に説明をし、協力できない人がいても責めることもありません。

なんとか妙案が実を結ぶのですが、自分たちが英雄になることや名を残すことは極端なまでに避けます。

英雄が生まれることで、村の中の人間関係が乱れることを恐れたからです。

せっかく資金が生活を潤しても、それでは豊かな生活は生まれません。

この吉岡宿の穀田屋十三郎と同士達は、世の中を統治する人が遺す歴史には残りませんでしたが、吉岡宿にある寺の住職が書いた国恩記という記録に残っているそうです。

我を忘れて村の将来のために動いたこの人たちの姿を自分の子に遺したいという思いで、磯田さんはこの本を書いたと言っています。

この本を読んで思い出したのですが、高校一年生の時に死別した父が「名を挙げようとしたり、賞賛を得ようとすれば、本懐からは遠ざかる」ということを折りに触れて話していました。

その時はよくわからなかったのですが、父も娘である私に「我を忘れて人に尽くす」という大切な生き方を遺したいと思ったのでしょう。

さて。私は働いている「つどい場はなうめ」は県が済生会金沢病院に委託した事業で、本多町にある社会福祉会館の三階にあります。

がん患者さんやご家族がほろりと気持ちをこぼされたり、医療や病気、症状とのつき合い方を相談したり、がんを体験された人同士で語り合ったり、がんとは全く関係のない雑談に花が咲くこともありますし、いろいろな図書も備えています。

初めて来てくださった方の中には「こんなにユルい（気楽な）ところだと思わなかった！」とおっしゃる方がいらっしゃるので、くつろげる雰囲気なのでしょう。

インターネットを使われる方は「はなうめ」と検索していただくとホームページにつながります。そうではない方は、日曜日と祝日以外九時から十六時までふらりと寄っていただいても良いですし、一度お電話くださっても結構です。

実は先の「無私の日本人」を貸してくださったのは、はなうめのボランティアさんなのです。こんな価値観を大切にしている方と一緒に、みなさんをお待ちできることをとてもありがたいと感じています。

プロフィール（略歴）
木村美代　きむらみよ
金沢生まれ金沢育ち。団塊ジュニア世代。金沢大学病院、済生会金沢病院での病棟看護師としての勤務を経て、平成二十五年より県が済生会金沢病院に委託したがんサロン石川県がん安心生活サポートハウス「つどい場はなうめ」の運営に携る。

真宗人物伝

第四十四回

徳法寺　杉谷　淨

明法（弁円）

今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の第十九番である明法です。山伏の弁円という名前の方が良く知られています。

明法を開基とする法専寺では、明法の俗名は平能宗とされています。平能宗は平清盛没後、平氏の棟梁となった宗盛の子です。つまり平清盛の孫ということになります。しかし『吾妻鏡』によりますと、平氏が壇ノ浦の戦いで敗れた後、平能宗は京の六条河原で斬首されたとされています。同じく明法を開基とする上宮寺では、関白藤原忠通の曾孫となっています。

ただし、いずれの寺でも、聖護院で修業し山伏となり、常陸国の佐竹氏の庇護を受け多くの門弟を持っていたとされています。

親鸞聖人の曾孫で本願寺を創設した覚如上人が編纂された親鸞聖人の伝記である『御伝鈔』には、親鸞聖人と明法のことが次のように詳しく述べられています。

越後国（新潟県）に流罪になっていた親鸞聖人は、赦免された後、常陸国（茨城県）の稲田に庵を構えます。すると、僧や在家を問わず、多くの人びとが押し寄せ、門の前は人であふれていたといいます。

聖人の教化が弘まっていくのを快く思っていなかった一人の山伏が、聖人を襲おうと機会をうかがっていました。すると、聖人が板敷山という深い山を常々通られていることを聞きつけます。しかし、何度も待ち伏せて襲おうとするものの、いつも空振りに終わってしまいます。不思議に思った山伏は直接親鸞聖人の庵を襲いに行くと、親鸞聖人はなんのためらいもなく出てこられました。その姿を見ると、襲おうと思っていた心がたちまちに消え、それどころか後悔の涙が溢れてきたのです。山伏は今ここを訪れた理由をありのままに伝えましたが、聖人は全く驚くこともなく山伏の気持ちを受け止めたのです。山伏はその場で弓を切り、刀を捨て、頭巾を取り、柿渋で染めた衣を改めて親鸞聖人の弟子となったのです。これが明法坊でした。

この中には明法とだけあり、弁円という名前はありません。弁円という名前が出てくるのは江戸期に入ってからのようです。この頃、浄瑠璃などが盛んになり、親鸞聖人ゆかりの物語も多く上演されるようになりました。すると、親鸞聖人の弟子になる以前の名前がないと都合が悪いので「弁円」という山伏らしい名前が付けられたのでしょう。「山伏」も、親鸞聖人の頃と江戸時代では内容も違っています。江戸時代は僧侶と山伏は一応区別されていました。しかし、親鸞聖人の頃は、山で修業している僧侶や聖などが山伏と呼ばれていたようで、僧侶と山伏の明確な区別はありませんでした。

いずれにしても、明法は有力な親鸞聖人の弟子であったようで、明法が亡くなったことを京都で知った親鸞聖人は、お手紙に「明法房が往生の素懐を遂げられたことを聞きながら、明法房ののこした行跡を粗略にするような人々はその同朋ではない」と書き残しておられます。

法専寺の裏には明法房が埋葬された塚があり、常陸大宮市の史跡となっているそうです。もし訪れる機会がありましたら、お二人の間にあった物語に思いを偲ばせてみてはいかがでしょうか。

『サンガ茶話会』

毎月第一木曜日
午後三時～五時
東別院真宗会館内
囲炉裏の間

お茶とお菓子をいただきながら、お坊さんと気楽にお話できる空間です。相談というほどではないにしろ、ちょっと聞いてみたい、いろんな人と話してみたいという方大歓迎です。もちろん無料です。お気軽にご参加ください。

真宗豆知識

仏教色々

私たちの宗は浄土真宗で、派は真宗大谷派です（東本願寺は通称です）。日本にはこれ以外にも多くの宗派があります。明治二十六年に宗教法人法が施行された段階では十三宗でした。華厳宗、法相宗、律宗、真言宗、天台宗、日蓮宗、浄土宗、浄土真宗、融通念仏宗、時宗、曹洞宗、臨済宗、黄檗宗です。戦後、清水寺や法隆寺、浅草寺、四天王寺などの有名寺院が本山から独立し新しい宗を名乗ります。また、明治政府により廃止された、普化宗や修験宗などが復興しています。しかしいずれも、中国から伝来した大乗仏教の系統であると言えます。

世界には大きく分けて三つの系統の仏教があります。

一つは、スリランカから十一世紀から十三世紀ごろにミャンマーやタイ、カンボジアに伝わった仏教で、上座仏教や南伝仏教と呼ばれるものです。紀元前三世紀ごろにインドからスリランカに仏教が伝わったとされていますので、インド初期仏教の面影を色濃く残しています。小乗仏教と言われたこともありますが、この呼び方は正確ではないということで今は使われていません。生きることはすべて苦であるとして、苦行によってこの生からの解脱を目指す教えです。ただ、伝承された地域の占星術や精霊信仰などと一体化し、その地域独特の仏教となっています。

もう一つが中国から朝鮮半島や日本、ベトナムインドネシアに伝わった、大乗仏教と呼ばれている教えです。一世紀ごろ、インドで龍樹を代表とする僧侶たちによる大乗仏教運動がおこります。これによって、お釈迦様以外の多くの如来や菩薩が登場する経典が作られました。「空」や「唯識」といった新しい教えもこの中から生まれます。中国に伝わると、儒教や道教の影響を受けて、中国独自の仏教に変化します。お盆のお参りや、禅や念仏も中国生まれです。これが日本に伝わると、更に変化を遂げて、今の日本の仏教になります。中国では一つになっている禅宗と浄土教が分化したり、三途の川のお話が生まれたりしました。

最後が、チベットからモンゴルやブータン、ネパールなどに伝わったチベット仏教です。かつてはラマ教と呼ばれていましたが、これも差別的な言い方であるということで使われなくなっています。インドから仏教が消え去ろうとしてた七世紀ごろに、ヒンズー教の呪術性を取り入れた密教と呼ばれる仏教がインド西部で生まれました。仏教にはなかった、宇宙創造や宇宙真理（大日如来）という概念もヒンズー教から組み入れられます。マンダラはこの概念を表したものです。日本では、この密教を、空海や最澄が大乗仏教の一部として取り入れ、真言宗や天台密教として今に伝わっています。八世紀ごろ、密教がチベットに伝わると、チベット古来の宗教であるポン教や大乗仏教と一つになります。これがチベット仏教です。十三世紀にモンゴル帝国の支配下に置かれると、チベット仏教はモンゴル諸部族に広く浸透し、世界各地に広がっていきます。今でもロシア共和国内のモンゴル系、トゥルク系国家であるカルムイク共和国、ブリヤート共和国、トゥヴァ共和国はチベット仏教徒が多く住んでいます。特にカルムイク共和国はヨーロッパ唯一の仏教国と言われており、大変な親日国として知られています。有名なダライラマはこの仏教の最高指導者になります。

それぞれ用いている経典が違うため、同じ仏教とはいうものの、かなりの差異もありますが、近年、ヨーロッパやアメリカで、それぞれが浸透し始めています。お互いに理解し合うことが、今後ますます重要になってきています。

（浄）

杉谷浄のラジオ案内

四月三日（火）
五月一日（火）
六月五日（火）
FM-N1（七十六・三MHz）で午後一時半から一時間放送します。番組名は「生活一番シャトル便　住職のよもやま話」です。再放送は放送日の午後十一時と土曜日の朝七時からの二回です。インターネットでも聞けます。

映画の紹介

『永い言い訳』
―逝く者と逝かれる者―

ヨーロッパには、メメント・モリという言葉がある。「自分がいつか必ず死ぬことを忘れるな」という意味のラテン語の警句である。真宗門徒であれば、さしずめ「あしたには紅顔あって夕べには白骨となる身なり」という耳慣れた蓮如の御文の一節にも重なってくる。

死はいつやってくるかわからない。だから常に死を忘れるなとは、洋の東西を問わず、繰り返されてきた警告である。

ここで語られる死は、当然ながら、自分の死のことである。しかしこれが他人の死であったらどうだろう。映画『永い言い訳』は、突然妻に先立たれた男の物語である。それはまさに突然やってきた。しかも最悪のタイミングで。

主人公衣笠幸夫は、有名な野球選手の名前をペンネームにもつ売れっ子小説家だった。彼が妻の死を知ったのは、何と浮気相手との情事のさなかだった。妻は親友とスキー旅行に行った先で、バス事故に遭って帰らぬ人となったのだ。

言うまでもなく、身内の突然の死は悲劇である。しかしその人に対して何らかの過ちを犯している場合は、別の意味での悲劇が始まる。死んでいった者に対しては、一言の言い訳も謝罪もできない。そして罪の意識は、残された者の中から永遠に消えない。

こんなとき人はどうなるのだろうか。この映画の主人公は、背負いきれないほどの罪の意識から、妻の死を素直に悲しむことすらできない状態になってしまった。

そんなある日、マスコミは、幸夫を題材にしたドキュメンタリー番組を企画する。そこで彼は、妻に先立たれた悲劇の小説家を演じるはずだった。しかし彼は、インタビューの中で思わず本音を叫んでしまったのだ。「貴女の死は暴力だ。」と。これは彼女に対する非難の言葉だった。

一方もう一人幸夫と同じ立場の人間、大宮陽一がいた。彼は妻とともに亡くなった親友の夫だった。彼は二人の子供を抱え途方に暮れていた。しかし幸夫と違い、妻の死を真正面からとらえ悲しむことのできる素朴な男だった。自暴自棄になっていた幸夫は、まるで救いを求めるかのように大宮に近づいていく。

そこで幸夫が始めたのは、大宮の二人の子供たちの世話をすることだった。それは妻の親友が残していった子供たちを育てることでもあった。彼には、そのことが亡き妻へのせめてもの罪滅ぼしのように思えたのだ。しかし…。

私たちはよく、亡くなった人は、あの世から残された者を見守っていてくれていると言う。しかし先に逝ってしまった人への思いは、そんな単純なものとは限らない。死んでしまってもなお、いや死んでしまったからこそ、その人と永遠に和解できないことだってあるのだ。そういう逝く者と逝かれる者との複雑な心のやり取りを描いた興味深い作品だった。

衣笠幸夫を本木雅弘、妻の夏子を深津絵里、大宮陽一をミュージシャンの竹原ピストルが演じている。原作・脚本・監督すべてを西川美和が手掛けた。二〇一六年公開作品。

（彰）

『心の相談室』

毎月第四土曜日
午後三時～五時
東別院横
「いちょう館」二階
相談無料

日常生活でのいろいろな悩み、家族のこと、友達のこと、学校のこと、仏事の疑問等を、僧侶がお聞きします。

本の紹介

親鸞の仏道
『教行信証』の世界

寺川俊昭
真宗文庫
東本願寺出版

先日金沢の教務所に立ち寄った際、たまたまこの本を見つけた。私の真宗理解は基本的に寺川俊昭氏によるものである。寺川氏の著作を精読していた三十代のころを懐かしく思い、手に取った。

講演を文章にしたものだが、全体として寺川教学の要点を手短にまとめた仕上がりになっている。主な真宗のトピックスには一通り触れてあり、しかも言葉が平易で分かりやすい。親鸞思想の大きな流れをつかむには最適な本であると言える。文庫であることもうれしい。

この本の特徴のひとつは、冒頭で法難について述べられていることである。この点について、少しご紹介させていただきたい。

『教行信証』が著された背景には、承元の法難に代表される、法然の念仏教団に対する数々の弾圧があった。このことがこの親鸞の代表的著作の性格を決定づけていると氏は述べておられる。

弾圧は、国家権力にすり寄る旧仏教側の人間の、異常なほどの危機意識の表れだった。法然門下の念仏教団は、比叡山や興福寺の僧侶にとって、自分たちの立場を危うくする危険な存在でしかなかったのだ。

親鸞はその状況を末法の世ととらえた。つまり、僧侶が本分を忘れて、相争う時代である。親鸞の生きた時代は、「教」だけあって行をする人も証（さとる）る人もいない、まさに末法の世そのものだったのである。（末法については、前号の第一〇〇号で詳しく特集しているので、参照されたい。）

社会的には、『教行信証』は、そのような守旧派の人々に向けた堂々とした開宗宣言だった。そしてそれ以上に、末法の世であることが、思想的に親鸞に大きな影響を与えている。念仏の教えとは、末法の世だからこそ開かれた仏教だったのである。

そのことを寺川氏は「末法濁世の凡夫に救いの道を告げ知らせる、法然の大悲を行証する仏教運動」であったと言い表しておられる。言葉の力を実感させる、まさに見事な表現としか言いようがない。

ちなみにこの本のもう一つの特徴は、広島出身の氏が、ご自身の原爆投下時の体験を語っておられることである。氏の求道の原点を見る気がした。

（彰）

各寺のご案内

◆常徳寺
金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL二四一―二六四九

◆徳法寺
金沢市野町
二丁目三二―四
TEL二四一―五二一九

◎徳法寺仏教入門講座―インド仏教史
毎月二十一日
午後七時半より
講師　杉谷　淨

四月　仏教以前一
　　バラモン教
五月　仏教以前二
　　六師外道一
六月　仏教以前三
　　六師外道二
七月　釈迦伝説の変遷

◎報恩講
五月二十日（日）
午前九時半より
正信偈のお勤め
午前十時半
法話
大谷専修学院院長
狐野　秀存師
正午
御斎　手打ちそば
更科　藤井
午後一時
コンサート
スンダリ・ミカ
午後二時半
ネパール報告
スンダリ・ミカ

徳法寺のホームページのご案内
「僧伽」のバックナンバーや報恩講、春秋彼岸の案内、お講の案内、学習会のレジュメ、交流広場などを載せています。アドレスは http://tokuhou-ji.com/ です。是非覗いてみてください。

編集委員
西山　彰（常徳寺）
杉谷　淨（徳法寺）